砂川で輝く人をPick up!

砂川で活躍されている方を取り上げ、産業、歴史、若手のホープ、芸術の視点からお話を伺いました。

砂川から世界へ翔（かけ）る

砂川中学校３年生
新崎 日菜子 さん

バレエは７歳の頃に友人に誘われて竹内バレエスタジオに入り、始めたのがきっかけで、最初はバレエで回ることがとてもうれしかったという記憶があります。竹内大祐先生にバレエを教えてもらっていて、練習は正直「厳しい」と思うことはありますが、わかりやすく丁寧な指導もあり、「これを乗り越えられればうまくなれる」という気持ちが私を後押ししています。今まで賞を取っていますが、一番印象に残っているのは中学１年生のときに初めて１位を受賞したNBAジュニアバレエコンクール札幌がうれしかった気持ちが一番強いものとなっています。中学校を卒業してからはバレエの海外留学をしてみたいと考えています。英語の勉強もバレエと併せて日々特訓中ですが、英国のロイヤル・バレエ学校や豪州バレエ学校などに挑戦をして、将来はプロバレエダンサーになりたいです。目標とする竹内バレエスタジオの竹内久美子さんや英国ロイヤル・バレエ団のプリンシパル（主席ダンサー）として活躍しているローレン・カスバートソンさんを目指して頑張っていきたいです。

受賞歴

2016年NBAジュニアバレエコンクール札幌
中学１年生部門　１位
指導者特別賞

2016年第４回台湾グランプリ国際バレエコンペティション
Pre-competitive部門
９歳～12歳　１位

2017年第５回台湾グランプリ国際バレエコンペティション
Junior部門13～15歳　１位
など、数々の賞を獲得

チャレンジ・チャンス・チェンジの精神で前へ進んでいきたい

合資会社ホリホールディングス
代表　堀　昭 さん

生まれも育ちも砂川ですが、大学や就職先は本州でした。父は菓子製造業を営んでいて、37年前に砂川で父や兄たちと一緒に仕事をしていきたいと思ったことがきっかけで戻ってきました。砂川は環境や空気が良く、みんなが優しく、温かい。もちろん同級生や学校の先生に会う機会も多くあるからだと思いますが、年を取るたびにますますいい場所だと思います。

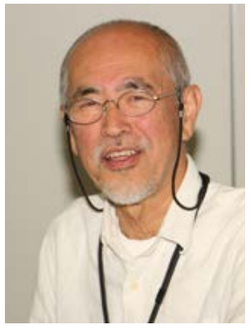
商売での苦労というのはもちろんありますが、今考えると本当に周りの人に助けられてきたということを実感しています。会社では毎年、全社員にクレド（信条）という小冊子を配り、会社の理念や経営方針などを共有し、社員が一丸となって取り組めるようにしています。会社を大きくすることは大事なことですが、まず働いている“人”を大事にしています。現在では80歳以上の方にも仕事をしてもらっており、会社が少子高齢化社会へ向けて残っていくためには、待遇も含めて福利厚生なども充実させていかなければならないと考えています。また、社員のモチベーションアップやレベルアップのために人材育成にも注力しています。そして核となるお菓子づくりについては、どこに出しても負けない、北海道らしいものを出していきたいと思っています。また、私が薬剤師ということもあり、体に優しくおいしいお菓子も展開しようと考えて、札幌医科大学様との共同開発商品も販売しています。海外への進出も準備段階ではありますが、まずは来日される海外からの観光客の方々に認めてもらい、通用するお菓子を作っていかねばならないと考えています。

時代の変化に対応し、将来を見据えて私の長男と兄の次男への事業継承も進めながら“チャレンジ・チャンス・チェンジ”のスリーCの精神で、今できることを１つずつ実行していきたいと考えています。

プロフィール

昭和57年より菓子製造業を営む。平成19年から株式会社ホリ代表取締役社長、平成27年から合資会社ホリホールディングス代表に就任。平成29年には、産業振興部門において市政功労者表彰を受賞。

砂川だけじゃつまらない。砂川から世界へ発信できる魅力がある



地域交流センターゆう
アートコーディネーター　太田 晃正 さん

地域交流センターゆうには、設計前から関わり続けていますが、「子どもたちを育てよう、子どもたちは未来だ」ということをコンセプトに活動を続けてきました。さまざまな施設を私は見てきましたが、ハード面でもゆうは大きすぎず小さすぎずバランスの取れた施設で、全国でも稀有な施設だと思っています。これも開設当初から市民の人が関わっているからだと思います。ゆうも11年を過ぎて、市民みんなが関わっていく循環が出来つつあると思っています。例えば、劇団の心呂座一つを取ってみても、入団したときには小学生でももう大学生や社会人になっていて、卒業してからでも教えに来ています。市民創作音楽劇心呂座から始まり、今では「人形劇」「キッズジャズ」「キッズ落語」が生まれましたが、まだまだ進行形です。これは、市民の皆さんのおかげです。いろいろな事を話してみても砂川は懐が深い人が多い印象です。

砂川を含めて北海道に伝統はないというけれども、伝統もよい場合もあれば伝統に縛られる場合があります。若い人が新しいことをやろうとしても慣習でやれないことが出てきてしまう。砂川では伝統をこれから作ることが出来る素晴らしい場所だと思っています。

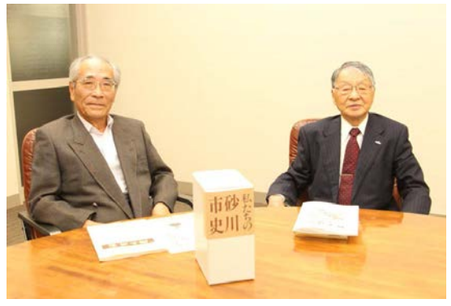
ゆうはそして砂川はまだまだ成長できるまち。子どもや大人だけがゆうを使っていくのではなく、いきいき体操など高齢者向けの事業をやっていますが、それだけではなく高齢者や幼児の劇団も作っていきたいし、アートの部分でも百枚襖などをみても砂川から世界へ発信できる伸び盛りなポテンシャルを持っていると思います。

プロフィール

昭和38年に東京厚生年金ホールに就職。昭和46年に札幌オリンピックを機に北海道厚生年金会館へ。退職後、平成10年～19年まで北海道文化財団トータルコーディネーター、平成18年10月より地域交流センターゆうアートコーディネーター。

砂川市の発展は“水”とともにある

砂川市郷土研究会　濱田 延榮 さん（右）
　　廣瀬　清 さん（左）



郷土研究会では歴史を振り返りますが、紐解く際には事象一つの事柄に対して見ていくのではなく、歴史の全体を見渡していかないと繋がらない点が数多くあると思っています。

砂川の歴史を語るうえではずせないのは“水との関わり”だと思います。一昨年には前線による35年ぶりの避難勧告が出されました。昭和56年も大きな水害でしたが、災害救助法が適用された昭和36年、37年でも71年ぶりと言われた大水害で、しかも１度ならず２度立て続けに起こり、道路などは水没し一面水しかなく、誰もが必死に救助活動をしていたことが一番記憶に残っています。

そのような水害とは対照的に豊かな水が肥沃な土壌を生み、農業の発展に加えて、東洋高圧工業（現在の北海道三井化学）や北海道電力、三井木材工業、北洋火薬など産業を発展させていったともいえるかと思いますし、産業の発展によって昭和33年にはテレビの普及率が全道一になるなど、砂川の文化の発展にも一翼を担っていると思います。

市制施行以降、市民運動から盛り上がった子どもの国の誘致や海洋センターなどの建設、はまなす国体の開催、アメニティタウン事業の推進、遊水地の設置、小中学校の統廃合など、振り返るとさまざまなことが思い出されます。今はスイートロードということで全国的にお菓子のまちで知られていることや医療のまちということで市立病院が市民の安全・安心を語るうえでも切り離すことはできないと思います。

砂川の市史を今年より作成を開始します。郷土研究会が研究してきた内容について、資料を提供する予定となっています。ぜひたくさんの市民の皆さんに砂川の歴史について関心を高めていただければと思います。

プロフィール

濱田延榮さん
平成22年より郷土研究会会長を経て平成28年より顧問
廣瀬　清さん
平成29年より郷土研究会会長、市史編さん委員会副委員長